

# 共同研究「異言語・異文化に触れる活動」

—幼稚園における実践的研究—

太 田 雅 子  
池 中 雅 美  
澁 谷 良 穂  
米 田 佐 紀 子

## はじめに

本年度5月より金沢市内二園で「異言語・異文化に触れる活動」を始めた。英語学・英語教育を専門とするが幼児教育については大学での授業や自らの子育てを通しての経験しかない者、幼児教育について専門的知識・実践の経験を持っているが外国語教育の専門ではない者、この双方がそれぞれの足りない部分を補いつつ、知識・能力を出しあって、異言語・異文化活動の実践にあたることになった。それを北陸学院短期大学共同研究としてまとめたものが本稿である。

ここでまず実践を行った二つの幼稚園の概要を述べる。A園はキリスト教主義の幼稚園で、教育理念も「個人を伸ばすこと」に置かれており、集団教授を極力避け、個々の幼児が園の理想とする教育に「気づくよう」配慮する形式を重んじている。規模も年長・年中ともにそれぞれ15名ほどの小規模園である。それとは対照的に、B園は1クラス25名ほどで1学年3～4クラスといういわゆる大規模園である。また、指導の傾向としても、文字の指導や体操教室を取り入れるなど就学前教育にも熱心で、一人一人の気づきを待つと言うよりは、集団教授が中心の園である。

本稿では、まず第一章で就学前異言語・異文化活動の意義について言語学的視点から述べ、第二章では英語活動の目的及び実施園での実践報告とその考察を行う。第三章は保護者及び幼稚園教諭を対象としたアンケートと授業の観察を中心に、保育の専門の立場からこの半年間の実践を評価・考察する。第四章では小学校英語活動からみた就学前異言語・異文化活動の意義と今後の課題について述べ、第五章で全体をまとめる。

## 第一章 就学前異言語・異文化活動の意義について

ここではまず幼稚園から英語を始めることの意義について考察したい。文部省が小学校における英語活動の導入を決定した現在も、幼少期英語活動（教育）の是非については論議を呼んでいるようだが、筆者達はこの半年余りの二つの幼稚園での実践を通し、また保育、英語教育、言語学の専門の立場から、幼児期に異言語や異文化に触れることは大きな意義があると考えられる。

もちろん、英語活動そのものの内容・指導法は言うまでもなく、幼稚園のカリキュラム全体の中での英語の位置付けや幼稚園教諭との連携の問題、小学校英語とのつながり等検討すべきことは

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

多々あり、難しい問題も多い。また既に実施され始めている小学校英語に関しても未だに論議されているように「日本語をまだ十分理解できない子どもに外国語が必要か」「幼少期に第二言語や異文化を学ばせることが幼児・児童の発達の妨げにならないか」などの意見があるのも承知している。しかし、幼少期に異なる言語や文化に触れることにはさまざまな利点があるのもまた事実である。以下、その利点について述べていく。

### 第一節 「音」の習得には早い時期がよい

幼少期に異言語・異文化活動をする利点の一つとしてまず挙げられるのは、年齢が小さければ小さいほど英語の「音」をより正確に身に付けられる点である。言語の習得には年齢が大きく関連していると言われており、中でも「音」の習得に関しては、年齢が若ければ若いほどよりネイティブスピーカーに近い発音の習得が可能であると言われて<sup>1</sup>。L2<sup>2</sup>学習者が成人である場合、いわゆる「外国語アクセント」と言われるものを完全に克服するには困難が伴うことが多い。カナダでイタリア語話者らを被験者として行った実験<sup>3</sup>によれば、外国語アクセントの強さの度合いは話者の英語学習を始めた年齢が高いほどより大きいという結果が得られている。言語習得理論によれば、成人と子どもでは明らかにどの程度外国語を自分のものにできるかという到達度 (ultimate attainment) において大きな違いがあると言われて<sup>4</sup>。学者によってその年齢には多少の幅があるが、一般的に6歳から9歳の間に「臨界期」、英語で critical period<sup>5</sup>と呼ばれる言語習得の壁のようなものが存在し、子どもには何らかの言語習得能力が備わっており、自然に言語を身につけることができるが、大人になると(臨界期を過ぎると)それが失われるのではないかとされている。

これらの先行研究が指し示しているのは言語習得、なかでも音声の習得においては年齢が重要な役割を果たしているという点である。第一言語の習得を完了していない幼児期に第二言語の習得がよりスムーズに行われるというのは興味深い。例えば鳥や動物も、歩き始める時期、初めて巣立つ時期など、みな似通った時期に色々なことができるようになる。赤ちゃんもハイハイや歩き始める時期、話し始める時期は生後何ヶ月位と、個人差はあるもののほぼ同じである。言語習得もそういった肉体的な発達過程と同じような部分があると考えれば、言語の習得にこういった「臨界期」が存在するのはごく当たり前と言えるかもしれない。日本人の中には英語の発音に苦手意識を持つ者が少なくないが、英語学習の開始時期がそれに関係しているのではないだろうか。

### 第二節 日本人はなぜ英語でコミュニケーションができないのか

現代の日本人は中学校で3年、高校でさらに3年と英語を最低6年間学校で学んでいる。しかし、よく言われているように実際にはほとんどの人が英語でコミュニケーションをとれるようにはなっていない。その理由の一つに英語と日本語の音声面・文法面での相違の大きさ、つまり言語としてあまりに違うために身に付けにくい、という点が挙げられる。音声面だけみても、thの音やv、

<sup>1</sup> Lenneberg 1967; Scovel 1988; Patkowski 1990 (as cited in Flege 1995, p. 234) 参照。

<sup>2</sup> Language 2、すなわち第二言語(外国語)。

<sup>3</sup> Flege, Munro and McKay (1995)参照。

<sup>4</sup> Long, M. (1990) 参照。

<sup>5</sup> Lenneberg 1967; Scovel 1988; Patkowski 1990 (as cited in Flege 1995, p. 234)

r、lのように日本語にない子音が英語には多く存在する。母音も日本語には「あいうえお」の5つしかないのに対し、英語には20以上もある。また音節の構造も日本語と英語では異なっており、子音連結など日本語になく英語にあるものも多い<sup>6</sup>。

第二の理由は英語の需要がないから英語力が伸びない、というものである。確かに日本は英語を母国語とする国の植民地になった歴史もなく、また学問や産業が発展しているので、英語ができないと学問や仕事に大きな支障が出る、ということはあまりない。また日本では入試制度に英語が取り入れられたことから、「試験のための英語」の存在が大きくなりすぎたのが、使える英語の普及を阻んでいる点も指摘されている。授業や学校英語のカリキュラム・指導法にも問題があるかもしれない。文法問題や訳読中心の英語教育は改善されてきているが、中学校の英語が本当に変わるには高校の入試を、そして高校の英語が変わるには大学入試を、見直さなければならないだろう。

### 第三節 異言語活動でなぜ「英語」を学ぶのか

上記のように日本人が英語をコミュニケーションの手段として使えない理由はいろいろ考えられる。しかし、世界に目を向けると、現実に英語は世界中に広がり、国際語・共通語としてより大きな役割を果たしつつある。例えば第二次世界大戦以前には、商業は英語、政治や外交・料理はフランス語、医学や哲学はドイツ語、というようにヨーロッパの主要言語の役割がだいたい決まっていた<sup>7</sup>。しかし戦後、事態は大きく変わり、さまざまな分野で最先端の情報を得るには英語の資料を読まなければならないようになってきている。

現在、英語を使用する人口は約20億とも言われており、英語はまさに世界で最多使用人口を誇る言語といえる。その中で英語を母国語として話す人は3億5千万人程度である。アメリカやイギリス、オーストラリアなどの英語圏以外の国、例えば南アフリカ共和国やインドなどでは英語は第二公用語であり、東南アジアの国々や南アメリカでも英語が広く用いられている<sup>8</sup>。

また最近では日本の中でも、大手の企業などで昇進のためにある程度の英語が求められる時代になった。しばしばメディアでも取り上げられているように、企業によっては公用語が英語で、会議も英語というところもある。

現代は情報化社会と言われているが、コンピュータで使用する言語の8割以上が英語であり、今後ますます英語の果たす役割が大きくなると思われる。現代社会に生きる私達にとって国際語である英語を学ぶことは、ある意味で当然のことと言えるだろう。次に視点を変えて心理的な面から幼児期に異言語・異文化に触れることの利点について考えてみたい。

### 第四節 心理的な側面からみた効果

筆者達は現在短大生に英語を教えているが、中学校・高校と身に付いた癖や日本語の影響が大きく、それを変えていくのは簡単なことではない。これには、上で述べた年齢の壁だけでなく、心理的なものも関係しているように思われる。年齢が高くなるとピアプレッシャー（仲間内のプレッシ

<sup>6</sup> Tsujimura (1995)、Kreidler (1989) 参照。

<sup>7</sup> 『現代の英語学』参照。

<sup>8</sup> 『現代の英語学』参照。

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

ヤー)が大きくなる。友達の前で大きな声を出すことが恥ずかしい、まして英語らしく発音するのはもっと恥ずかしいとなるようである。時には故意に日本語的に発音していることもある。

幼少期に英語に触れることの利点はここにもある。まだピアプレッシャーの比較的少ない時期に英語の生の音に触れることで、英語を英語らしく話すのは決して恥ずかしいことやおかしいことではなく、むしろコミュニケーションにとっては好ましいということを身をもって感じられる。そして「異なる」音や言語に対して柔軟で感受性の鋭い幼児期に英語に触れることで、英語に対する「耳」を養い、それがよりよい発音を身につけることにつながるのではないだろうか。

### 第五節 リスニングの重要性

もう一つ早い時期に英語を始めることの利点として挙げられるのは、それだけ多くの英語に触れる時間が持てることである。話せるようになるまでに数千時間ものインプットが必要だと言われている。中学校、高校と英語を学んでも、その大半が日本語の訳や文法の説明に費やされるため、実際に英語そのものに触れる時間はなかなか取れないのが現状であるが、より早い時期から、特に「耳を通して」、つまり文字を介せず、リスニング中心に英語に触れるのは大きな意義のあることだと思われる。リスニングの重要性は多くの学者が指摘しているところだが、赤ちゃんも母親や周りの声をたくさん耳にしているうちに自然と言葉が身につく。幼児は赤ちゃんと同じではないかもしれないが、それに近い、自然な形で英語を「固まり、チャンク」として受け入れていくと言われる。そういう時期に生の英語の音を聞かせることで体の中に英語のリズムができあがり、より自然な英語が身に付くと思われる。

また、文字を介さずに学ぶことは、子音連結のように英語にあって日本語にない音のつながりを身に付ける上でプラスであると思われる。日本語は5つの母音を除くと CV つまり子音と母音が常に交互に現れる、仮名で表される音がほとんどである。しかし英語では CCCVCCC<sup>9</sup>のように、子音が3つまで連結することができる。文字の入った小学生以上ではどうしても母国語である日本語の仮名の影響が出やすく、CVCV…というふうに子音の後に母音を挿入してしまうことが多くなり、ネイティブスピーカーの発音と違ったものになりがちである。米田(1998)は、日本語母語者と英語母語者を対象に音節構造の実験研究を行った。この研究は言語によって CV-C と分けるか C-VC と分けるかという言語間における音韻構造の相違を見ようとしたものであるが、日本語話者には日本語の文字・音韻構造の影響が見られるという結果が得られた<sup>10</sup>。その点幼児は聞いた音をそのまま「かたまり」として繰り返すので、より自然な発音が身に付きやすいと言えよう。

### 第六節 異文化理解へのつながり

次に就学前異言語・異文化活動が異文化理解に果たす役割について少し述べたい。いわゆる国際社会の到来ということが言われて久しい。身近なところに目を向けても、例えば留学生、ビジネスマン、研究者、そしてその配偶者や子どもなど、外国人と会う機会が増えてきている。

<sup>9</sup> CCCVCCC の例としては、springs がある。

<sup>10</sup> 米田佐紀子(1998) Experimenting with the Internal Structure of the Syllable in Japanese. 北陸学院短期大学紀要第30号参照。

異文化について学ぶということは、単に自分の属する集団の固有の文化と異なるものを学ぶ、ということではなく、自分自身について学ぶことでもある。幼児期にどこまで異文化理解ができるかという疑問が残るだろう。しかし筆者は一番大切なのは異文化の形態そのものを学ぶこと、例えばアメリカではこうだ、中国ではこうだ、ということではなく、自分と違うものに目を向け、その違いを善悪、好悪あるいは上下関係などの価値判断で捉えず、ありのままに「違いを違いとして」受け止める姿勢だと考える。偏見を持たず、価値判断なしで異文化をそのまま違いとして認めるのは、容易ではない。特に年齢が高くなり、自国の文化・習慣をすべて「あたりまえ」のこととして受け止めていればなおさらであろう。以前テレビで日本語で道を聞かれているのに「英語わかりません」と言って逃げていく人の話をしていたが、ここで問題なのは英語に対する自信のなさや異質なものを避けようとする態度であろう。コミュニケーションを図ろうとする意思があるかどうか、その気持ちが大切なのではないだろうか。

幼少期に異言語に触れ、かつ異文化理解に目を向けさせることの意義がここにある。より若くて固定観念が少なく、かつ自然な言語習得が可能なときに、母語とは異なる言語に触れさせることによって、言葉だけでなく、異文化や異なる価値観を持つ人々と積極的に交わろうとする意欲を育て、外国語によるコミュニケーション能力を自然に育成することができるのではないか。

もちろん英語を学べば即、国際理解になるわけではない。しかし、ある意識調査によると興味深い結果が得られている。これは小学校時代の英語学習の経験が、学習者のその後の英語学習や外国語学習に対する態度や動機に及ぼす影響、また英語圏や英語圏以外の外国の文化や価値観に対する態度に及ぼす影響を調べたアンケート調査<sup>11</sup>である。これによると経験者のほうが①英語学習の動機として、イギリスやアメリカの人々やさらにいろいろな外国の人々と話したり友達になるため、と考える傾向が強く、②英語学習に非常に意欲的であり、授業だけでなく、積極的にラジオ、TVなどで自主的に英語学習に取り組む人が多い。また将来にわたって英語や英語以外の外国語を学習することに対して積極的である。

さらに英語学習経験者と非経験者では異文化に対する態度も異なるという結果が出ている。経験者は①英米の文化に学んだり考え方を理解することだけでなく、英米以外の外国文化に学んだり、英米人以外の外国の人々の考え方を理解することが大切だとする傾向が強く、②英語学習を通して、日本の文化に興味を持ち、日本人の考え方や行動がより理解できるようになり、かつ日本の文化や考え方を外国の人々に紹介することが大切だと考えるようになったとする者が多い。

これらの調査結果から、小学校で英語にふれることは学習者の英語学習だけでなく、それ以外の外国語に対する学習意欲をも高め、同時に異文化や価値観の違いを理解し、積極的な国際理解の姿勢を育てるために非常に有効であるということがわかる。これは小学生を対象としたものであり、子どもを対象としたものではないが、就学前異言語・異文化活動の意義を考える上で興味深い。

<sup>11</sup> 樋口忠彦、國方太司ほか（1994）「早期英語学習の学習者の英語および外国語学習における態度と動機に及ぼす影響」『日本児童英語教育学会研究紀要』第13号より（樋口ほか『小学校からの外国語教育』参照。）

## 第七節 日本語への影響

ここまで幼少期に英語を教えることに賛成する意見を述べてきたが、世間ではいまだに日本語への影響を心配する声がある。確かに幼児期といえば言語の発達段階においても大切な時期であり、母国語も完全でない時期に言語学的に母語と大きく異なる英語という異言語に触れて悪影響がないのか心配するのは当然かもしれない。しかし、筆者は幼稚園での英語活動の時間の絶対量の少なさから日本語への影響はあまりないと考える。現在二園で英語活動を行っているが、クラスはそれぞれ週一度、各年齢グループに長くても20分となっている。定着という意味では毎日の幼稚園のカリキュラムに組み込んで行っていくのが理想であるが、他の活動や英語指導員の問題もあり、毎日英語活動を行うのは困難である。それに対して幼稚園での担任教師との会話、家族や友達との会話、テレビ等、英語活動以外はすべてが日本語であり、日本語に触れている時間は英語と比べものにならないほど圧倒的に多い。言語学的に見て英語が何らかの影響を、日本語に与えるとは考えにくい。

## 第八節 まとめ

以上、幼少期における異言語・異文化活動の意義について、言語習得の面、特に音声面からみて早い時期に多くの英語に触れることが大きな意味を持つと思われること、心理面でもピアプレッシャーのより少ない時期に異言語に触れるほうがよいと思われること、異文化に対する偏見を減らすという意味でも幼少期に触れることで異なるものに対するこだわりが少なくなると思われること、そして日本語への影響があるとは考えられないことなどを述べてきた。これらを通して、幼児期に英語に触れることはさまざまな利点があることが明らかになった。次章では、実際の英語活動がどんなものであったか、英語指導の中心となってカリキュラムを組み、指導を行ってきた米田が、半年間の二園での実践報告とそれに基づいての考察を行う。

## 参考文献

- 石黒昭博、山内信幸、赤埜治之、友次克子、北林利治。(1993). 『現代の英語学』金星堂出版。
- Flege, J. E. (1995). Second language speech learning theory, findings, and problems. A chapter in Strange, W. ed. *Speech Perception and Linguistics Experience: Issues in Cross-Language Research*, 233-277.
- Flege, J. E., M. J. Munro, & I. R. A. MacKay. (1995). Factors affecting strength of perceived foreign accent in a second language. *The Journal of the Acoustical Society of America*, 97, No. 5, Pt. 1, 3125-3134.
- 樋口忠彦ほか編。(1994). 『小学校からの外国語教育』研究社出版。
- Kreidler, C. W. (1989). *The Pronunciation of English*. Oxford: Blackwell.
- Long, M. (1990). Maturation constraints on language development. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 251-286.
- Tsujimura, N. (1995). *An Introduction to Japanese Linguistics*. Cambridge, MA: Blackwell.
- 米田佐紀子 (1998). Experimenting with the internal structure of the syllable in Japanese. 北陸学院短期大学紀要第30号. 173-190.

(第一章担当：澁谷良穂)

## 第二章 幼稚園での異言語・異文化理解の実践と考察

ここでは、実践報告にあたり、目的・幼稚園教諭と英語指導員との連携・教案の作成の観点などに沿って論を進めていき、最後にそれらに基づいて考察を述べる。

### 第一節 英語活動の目的

この英語活動を始めるにあたって、幼稚園側と英語指導員側とが話し合いを持ち、以下のように目的を明確にした。具体的な内容は以下の通りである。

- (1) 子ども達に日本語とは違う言語があり、言語が違えば文化にも違いがあることを知らせる。
- (2) 幼い頃から異言語・異文化体験をすることによって「違いがあることは当たり前ののだ」という「知識」を体験的に学習させる。これが異文化受容の態度育成につながり、将来国際社会に出た時に肯定的な態度を持ってさまざまな人々と交流できる素地を作ることとなる。
- (3) 第一章で述べたような幼少期の子どもの言語習得に対する利点や、発達段階で見られる繰り返しを好むという特性を生かし、出来るだけネイティブスピーカーに近い音に耳を慣らし、発音できるようにする。

以上の目的のため、英語指導員は日本語を一切使わないこと、英語名を使うこと、必要な場合の指示等は幼稚園教諭が日本語で行うこととした。英語活動は週に一度、各クラス20分程度である。本来なら毎日少しずつ行う方が良いが、幼稚園の他の行事・活動の都合や英語指導員の本務校の勤務もある。まずはこのレベルから始めることとした。

### 第二節 幼稚園教諭と英語指導員との連携

子どもにとって英語活動は毎日の生活の一部である。言語としての英語も生活の一部であらねばならない。英語があくまでもコミュニケーションの道具であることを子どもに理解させるには、出来るだけ日頃日本語で行われている活動を英語ですることが最良の方法である。これによって子どもの抵抗感を減らすことができるであろうと考えた。しかし、英語指導員は週に一度、20分程度しか子どもに触れ合うことがなく英語活動以外の園での生活を見ることはほとんどないので、子ども達の日常の様子を知ることは困難である。また4、5歳児の発達段階は大まかにつかめても個々の性格などの把握やそれに合った対処となると幼稚園教諭以外にはいない。

実りある英語活動を目指すために、まず年度当初と2学期始めとに幼稚園教諭と英語指導員とで話し合いを持ち、その他にも必要と思われる時は適宜意見交換するなどして、連携を図った。最初は互いに遠慮もあり、必要な意見交換が十分に出来ない場面もあった。しかし、活動を行っていくうちに幼稚園からは「もっと英語活動の内容を保育の中で生かせるよう事前に指導内容を知りたい」「子どもによっては英語だけの授業に戸惑いと不安を感じているものもいる」との声も聞かれた。これらは「英語は嫌だ」と子どもに思わせることは避けたかった我々英語指導員にとって重要な情報であった。

日本語を使うことによって不安を解消するのではなく、他の方法で抱えている問題を克服すべく、様々な工夫を2学期から始めた。2学期からは幼稚園の行事内容や英語活動ならではの文化紹介などを予め出し合い、予定を大まかに立てた。そして、教案も出来るだけ一週間前にはファックスで幼

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

稚園側に送り、問題があれば意見を出してもらったこととした。また、ルールが複雑なゲームや「英語だけじゃ分からない!」と不安がる子どものそばで、幼稚園教諭が日本語で内容の説明をするなど、橋渡し役をしてもらった。

幼稚園教諭にとっても、英語指導員にとっても、この連携は大きな意義を持っている。現在のファックスによる教案送付や話し合いの持ち方が最良の策であるとは思わないが、幼稚園教諭は園児がいる間は教室から離れられないので時間外にしか会議を持つことが出来ず、しかもその時間も思うように取れない現状の中ではうまく機能していると考えている。

行事においてはさらに綿密な連携が必要であった。ハロウィンではパレードをするか否か、するなら手順や順路はどうするか、お菓子はどうするか等の打ち合わせをした。またクリスマスについては、A園がキリスト教主義の幼稚園なので教える単語や歌についても幼稚園の希望を取り入れる、使用する絵本の内容について互いに意見を出して検討するなど、より細かい打ち合わせを行った。

### 第三節 教案作成にあたって

教案は先ず幼稚園の年間行事を押さえた上で、大まかに各学期に何をするかを決めた。その場合、英語の文型や表現というよりは文化的行事で英語文化のうち何が紹介しやすいかを優先して選んだ。1学期の場合は七夕、2学期はハロウィンとクリスマスといった具合である。

今年度は英語活動の初年度ということもあり、英語指導員は市販のテキストを一つ選んでやってみた。しかし一回15分から20分しかないこと、週に1回であることなどから、必ずしも我々のケースに合わないことを感じ、様々な教材を適宜用いることにした。主に、実際にアメリカの幼稚園で使われている *Kindermusik* や *Wee Sing products*、絵本やエプロンシアター<sup>12</sup>などである。

1学期の最初は挨拶、歌、手遊びを中心に進めていったが、単に体を動かすだけでは活動に幅がなく、その場では楽しくても知的興味に訴えるものではなかった。そこで5回目位から、日頃から知っている『3びきのこぶた』や『おおきなかぶ』といった「お話」をエプロンシアターで行った。子ども達はエプロンシアターに釘付けになった。しかし、英語指導員が交替で教える関係上統一が図りにくかったので繰り返しは敢えて行わなかった。2学期からは絵本を使うことによってこの問題を解決し、言語面での定着をもっと積極的に図るようにした。

このように年間を通しての指導案はまだなく、教案は毎回の子どもの反応に基づいて英語指導員が立て、それを幼稚園に送るといった形を取っている。これを蓄積して検討・加筆・訂正を重ねていくことでより良い活動ができるのではないかと考えている。

### 第四節 実際の指導

指導開始当初はB園の場合、1クラスを2グループ(12~13人ずつ)に分け、英語指導員が分担して教えた。しかし子どもの掌握や日本語を使わなくてはならない時にはやはり担任教師が必要である。そこで指導員2人が全員一緒に指導することにした。つまり、教室には英語指導員2人と担任教師1人がいることになる。

<sup>12</sup> これらの教材については章末に提示した。



実際の英語指導については次のように行った。1学期は、トピックは継続的だが内容はあまり重ねず歌や活動は2回くらいの繰り返しで次々に変わっていった。挨拶、名前の応答、“What’s this?”に対する応答、命令(“Sit down, stand up.”等<sup>13)</sup>)、動物の名前、体の部位の名称、家族、数などについて歌や手遊びで行った。1学期は前回の復習から入り、新しいものを1つするという形を中心に行ったので、子ども達は毎回新しいものをするという印象と期待があったと思う。しかし、2学期はこれに対し、一冊の本を中心に手遊びなどを組み、何回かかっても、文が言えるようになることを目的とした指導に変えてみた。この変更に対する考察については次の節で述べる。

また、新出単語がある場合にはフラッシュカードを作り、音節ごとに手を叩かせ、リズムを取らせるよう配慮した。この際、日本語にない音 [f, v, θ, ð] 等は強調して示した。しかし、あまりやりすぎると弊害がある(例えば筆者は自分の子どもが [i] を [u] と勘違いしていたので舌を見せて強調した結果却って不自然な [i] となり、治るのに時間が掛かった苦い経験を持っている)ので、何度も機会がある毎に繰り返すほうがその場で「教え込む」より良いと考え、3回前後やらせるだけで次に移ることにしている。

毎回の教案については枚数の関係上割愛するが、ここではいくつか子ども達の反応が良かったものを紹介する。

#### (1) 体の部位の紹介

ここでは、子どもの視覚・聴覚・触覚等、味覚以外のすべてを使って定着を図った。導入に関しては、単に“This is an eye.” “This is an ear.” などとしても面白味はない。面白くなければ子どもは乗ってこないし、覚えない。そこで、これをリズムに乗せてみた。

Eyes, eyes, blink, blink, blink. (目を blink という回数分パチパチする)

Nose, nose, sniff, sniff, sniff. (鼻でクンクンと嗅ぐ真似をする)

Hands, hands, clap, clap, clap.... (両手でパチパチ叩く)

といった具合である。これを“head (nod), mouth (open and shut), knees (bend), feet (stomp), ears (listen), shoulders (shrug), toes (wiggle)” などにも当てはめる。子どもは自分から言えるようにはなかなかならないもののリズムに合わせてからだの部位をあちこち動かすことが楽しい様子であった。子どもによってはその中からいくつかの単語を覚えたようである。

#### (2) エプロンシアター

エプロンシアターは子どもに人気であった。1学期は『3びきのこぶた』、『おおきなかぶ』、『くいしんぼゴリラ』であった。これらは子ども達がどれも良く知っていたのでとても楽しんでいった。

『3びきのこぶた』は有名な3匹の兄弟こぶたが藁、木、レンガでそれぞれ家を作る話である。straw, wood, brick を説明するところではそれぞれ実物を見せながら行った。この話ではおおかみが繰り返す“I will huff. I will puff. I will blow the house down.”という台詞を最後には英語指導員と一緒に言う子どもも出てきた。

<sup>13)</sup> 指導法としては Total Physical Response を主に用いた。

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

『おおきなかぶ』はロシアの民話である。かぶの種を植えたおじいさんがいよいよ大きくなったかぶを抜こうとするが1人では抜けず、おばあさんと一緒でも抜けず、孫娘、犬、ネコと徐々に助けが増えても抜けず、最後にネズミが助けたら抜けたという話である。これも『3びきのこぶた』同様、「うんとこしょ、どっこいしょ」が繰り返しの台詞となる。英語では“*Heave-ho, Heave-ho*”があるが、かなり古臭い言い方で、今では船乗りしか使わないというネイティブスピーカーの助言を得て“*One, two, one, two.*”とした。子ども達はここでも一緒になってジェスチャーをつけて台詞を言っていた。

『くいしんぼゴリラ』はゴリラがバナナ、レモン、玉ねぎと次々に見つけては皮をむいて食べていくという話である。そして玉ねぎにいたっては「皮むいて、皮むいて、食べるころがなくなった！ええん。」という話である。ここでは“*peel the banana (lemon, onion), peel the banana (lemon, onion)*”を繰り返す。子ども達はそこを一緒に言い、動作をつけて楽しんだ。

ここでは子ども達の知っている日本語の『くいしんぼゴリラ』の歌<sup>14</sup>を用いた。子ども達は「この歌知ってる！」と喜ぶと同時に、日本語と英語のリズムの違いを感じてとまどっていた。

### (3) 絵本

2学期に入って *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* と *Where's The Halloween Treat?* の2冊の絵本を用いた。方法としては、最初は英語指導員が読む英語を子どもに聞かせ、徐々に子どもに言わせる箇所を増やしていった。たとえば、“*Five little monkeys jumping on the bed.*”という文では、英語指導員が最初は全文を読むが、慣れてきた頃に、わざと“*Five little monkeys jumping on the...*”と文を止め、持っているマイクを子どもに向けると（マイクは英語指導員と子どもの発言者変更の合図をする格好の道具であった）、子どもは“*bed*”と言う。言える箇所が“*bed*”から“*on the bed.*”へ、次に“*jumping on the bed.*”そして“*Five little monkeys jumping on the bed.*”へと伸びていく。

難しいのが文の言い出しのところである。英語指導員が“*Five little...*”と言えば、出だしが明確なので子どもは続いて言い始めるが、最初からとなると難しい。筆者ら英語指導員はページをめくり、“*How many monkeys?*”と毎回促すことによって引き出した。

*Where's The Halloween Treat?* は、ハロウィンに近い時期に行った仮装パレードの準備に用いた。絵本に入る前に、導入としてハロウィンについての記事が載っているアメリカの雑誌や本を用いて簡単に行事の紹介をした。

この絵本は、ページをめくる毎に1枚ドアがあり、ドアに1、2、3、とそれぞれ数字が書かれている。最初は子どもが1人で、ドアの数も「1」。二人になると「2」と言った具合で7まである。家々をまわる仮装した子どもが“*Trick or treat! Trick or treat! Give me (us) one good thing (two good things) to eat.*”と声を掛け、ドアを開けるとその子どもの人数分お菓子を持った人が、やはり仮装をして、ドアの後ろに立っているというものである。

<sup>14</sup> 歌は米田が翻訳し、北陸学院短期大学講師の Marie Clapsaddle 氏に英語の校閲をお願いした。

子ども達は何度も英語指導員と一緒にドアをノックする真似をし、“Trick or treat! Trick or treat! Give me (us) one good thing (two good things) to eat.”と一緒に大声で叫び飽きることがないようにであった。

#### (4) 軍手パペット

家族の手遊び“Where is Father?”では、家族の顔を軍手にフェルトで付け、歌に合わせてパペットを動かした。これはフラッシュカードより効果があったと考えている。軍手パペットは *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* にも応用した。

### 第五節 実践から得た考察

上で述べた以外にも多くの活動を行ってきたがその中で英語指導員が学んだことがある。子どもは同じ教材を使うと最初は「またあ」などと言って拒否反応を示す。最初はこの言葉通り「嫌なのだろうか」「つまらないのだろうか」と考えていたが、実はそうではなかった。少々工夫を指導面に加えることによって、子ども本来の「繰り返し好き」が現れてくる。一度や二度で終わった活動よりも何度も繰り返した活動の方が、次のような効果があることを痛感した。①徐々に慣れてくるにしたがって発音出来るようになる子どもが増える、②自信を持って大きな声で言える子どもが増える、③最初理解出来ていなかった子どもも数回目に理解ができるようになる。このことは絵本に限らず歌や踊り、手遊びについても同様で、繰り返すことの大切さを示している。

繰り返しと同時に大切なのが、目で見て話の内容が分かることとリズムがあることである。たとえ繰り返しが好きでも、話が複雑だったりリズムがなかったりするとすぐに飽きてしまう。内容がつかめないと視覚だけで子ども達の興味をひきつけておくのは難しい。ドアを叩く音、足音など様々な効果音を作ってみても、子どもは正直である。リズム・話の展開・提示の工夫（紙芝居か本かペープサートか等）の全てに配慮が必要である。

この他、実際指導をしてみると、「英語しか使わない」ことによる障害がいくつか見えた。子どもが慣れてきて、おどけから騒ぎになるなどのいわゆる「学習態度」に問題が出た場合の対処である。英語で叱られても態度を改める子どもばかりなら問題はない。大抵てこずるのは日本語で叱ってもなかなか聞かない子どもである。そういう子どもは人間関係が出来上がっている担任教師のいうことは聞いても「訳の分からない言葉を使うおばさん」の言うことなど聞く訳がない。この問題については担任教師と話し合い、「いつでも守るべきルールがある」ことを指導してもらおう等の対処を取ってもらい、うまく行くようになった。

また、もう一つの問題は新しい環境になじみにくい子どもの問題である。通常の保育でも、園に慣れるのに時間がかかり、園に慣れても、新しいことがあると不安になり担任から離れられない子どもがいるものである。このタイプの子どものためにも見も知らぬ英語指導員による英語活動は恐怖だったようである。無理強いをすることによって逆に英語嫌いを作ることは我々としても本意である。教室に残りたい子どもは教室に残って、英語を体験したい子どものみ「英語をやっている部屋」に行くという「選択制」も考えた。大いに悩んだ問題であったが、回を重ねるうち、そういう傾向を持つ子ども達も楽しみに待ってくれるようになった。

## 第六節 まとめ

半年間にわたる英語活動の実践を簡単に述べてきた。子どもの日常生活の一部としての「英語活動」が将来の国際人育成の素地を作るために効果があるようにと試行錯誤をしてきた。子どもの「育ち」を中心に据えることを忘れず、そこに異文化を受け入れる態度を養い、今しか出来ない「英語体験学習」をして欲しいと願ってきた。

しかし、それを実践に移すこと、そして継続していくことは机上で考えるよりも難しい。筆者はアメリカの幼稚園に長男を2年通わせた中から得た「英語で子育て」の経験を生かし、なおかつ現在海外生活経験は全くない3歳である次男を実験台にどの教材、どの指導法なら子どもが効果的に学び、興味を持つかを試しつつ実践に臨んでいる。

本文でも述べたが、本来必要な毎回の反省会を幼稚園側と持つことが出来ていないため、少々一方的な見方しか出来ていないのではないかとも考える。そこで保護者及び幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を行った。「実践」からだけでは見えない要素が見えてくるだろう。次章ではその結果について述べる。太田（本学保育学科助教授）が、保育の専門の立場から、半年間の実践観察もアンケート結果に含めて評価・考察する。

## 参考文献

- 内田 伸子 (1999). 『発達心理学 言葉の獲得と教育』 岩波書店  
久埜 百合 (1999). 『こども英語相談室』 ピアソン

## 使用教材

- Beall, Pamela Conn and Susan Hagen Nipp. (1981). *Wee Sing and Play: Musical Games and Rhymes for Children*. [with cassette]. Los Angeles: Price Stern Sloan.  
——. (1984). *Wee Sing for Christmas* [with CD]. Los Angeles: Price Stern Sloan.  
——. (1998). *Wee Sing Games, Games, Games* [with cassette]. New York: Price Stern Sloan.  
Christelow, Eileen. (1989). *Five Little Monkeys Jumping on the Bed*. New York: Scholastic.  
Swears, Linda & Lorna Lutz Heyge. (1991). *The Kindermusik Series* [with cassettes]. North Carolina: Music Resources International.  
Ziefert, Harriet. (1985). *Where's The Halloween Treat?* New York: Penguin Books.  
中谷 真弓 (1998). 『エプロンシアター くいしんぼゴリラ』 株式会社メイト  
——. (1998). 『エプロンシアター 3びきのこぶた』 株式会社メイト  
——. (1998). 『エプロンシアター おおきなかぶ』 株式会社メイト  
ラボ教育センター (1992). *The Turnip* [with CD]. 『かぶ』 ラボ教育センター

(第二章担当：米田佐紀子)

### 第三章 アンケート・観察に基づく実践に対する評価

A園、B園における『異文化・異言語に触れる体験』の一貫としての『英語を使って遊ぶ』、『英語活動』の半年間の取組みの評価を行う上で、活動時間外での子ども達の反応を知る必要があると考えた。そこで保護者ならびに幼稚園教諭に対してのアンケートを実施することにした。『英語を使って遊ぶ』、『英語活動』に関連して家庭や園での子ども達の様子について自由に記述してもらうアンケート用紙を11月中旬、活動に参加している全園児の保護者と教員（B園のみ）に配布した。その結果、保護者からは77件（A園：16件、B園：61件）、B園の教員からは11件の回答を得た。

保護者による回答のうち約8割が、「子どもが英語や活動に興味を示し始めているようである。」「活動の日を楽しみしている。」「活動の様子をうれしそうに話してくれた。」などの肯定的反応を示す内容の記述であった。異文化・異言語に対する違和感が取り除かれ、それらに対する意識が育って行くためには、英語を使っての活動が面白い、楽しいということが大変重要である。その点から見て、今までの活動内容はほぼ適切であったと評価できると考える。

異言語・異文化活動の時間帯には、子ども達は英語の名前が書かれた名札をつけて参加するのであるが、日本語の名札を取りはずして、英語のものにつけ変えるときを楽しみに待っているという内容のものがあつた。また、帰宅後、兄弟で互いに“*What's your name?*” “*My name is ....*”と言い合って遊んでいるといった内容も報告されている。自己意識が発達していく過程にある幼児期の子ども達は、自分の名前について日頃馴染んでいる文字や言い方とは異なる表現方法があることに驚き、関心を示しているのであろう。

「昼食にバナナやみかんを見ると、英語のアクセントで表現し、楽しんでいる。」といった内容にも見られるように、子ども達は、自分が知っている事物について異なった言葉で表現ができることを理解してきているように思われる。事物の概念を日本語と英語の二つのシンボルで表現することに興味を示しているようである。

これまでの活動の中で、いくつかの「お話」が紹介された。絵本の読み聞かせや、エプロンシアターやパペットなどの視聴覚教材を用いて語られたが、*The Turnip* 『おおきなかぶ』や *The Three Little Pigs* 『3びきのこぶた』等すでに日本語で知っている話や生活経験の範囲内でイメージしやすい題材が選ばれていた。これは、全体の文脈、意味内容から個々の語意を推測し、単語の意味を発見するという主体的な知的作業を促すため、子どもにとって面白いと感ずることができるのであろう。

回答の中には、活動の中で学んだ英語での表現を、日常生活の中で使っている様子を記しているものがいくつかあつた。「“*Good morning.*”と行って登園して来る子がいる。」「買い物に行った時などに、店員さんに“*Thank you.*”と行って品物を受け取る。」などの事例は、子どもが英語もコミュニケーションの手段として使うことができると理解していることを示しているのではないだろうか。日本人同士では、英語をコミュニケーションの手段として用いることに必然性はないのであるが、子どもが生活の中で英語を使おうとする時、多少なりともその意思や気持ちを受けとめ笑顔で返すなど、何らかの反応を示す大人が周囲にいることが大切であり、それが英語を使う活動が

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

必然的であると感じさせることに繋がると考える。今回のアンケートの中には、「毎回の活動内容を知らせて欲しい。歌の歌詞や楽譜を頂きたい。」といった要望が何件かあったが、親子で活動内容に関しての話題を共有したい、一緒に英語活動を楽しみたいという理由からである。英語活動の内容（歌やお話）を媒介として親子が相互のやりとりを楽しみ、イメージや感動を共有することから子どものうちに安定や自信が生まれ、それらを基にして、異言語という新たなるものに向かう力が養われるのだと思う。故に家庭との連携を図っていくことも今後検討して行きたい。

子ども達は、英語活動の中で紹介された歌や手遊びを、家庭においてもやって見せたり、口ずさんだりしているようである。その中でも「“No more monkeys jumping on the bed!”と歌っていました。」など *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* についての記述が数件あった。この話や手遊びは9・10月に使用された教材の一つであるが、大型絵本の読み聞かせと内容に沿った手遊びが、数回に渡って繰り返行われた。3回目ごろから、かなりの人数の子が絵本のせりふを覚えてしまい、英語指導員が絵本を読むのに合わせて英語のせりふを言っている姿が観察された。この教材は、言葉がリズムカルで語呂がよく、同じ文句がリピートされている点で、子ども達にとって心地よく、また注意を引いたのだと思う。

‘Stand up’ ‘sit down’ ‘run’ ‘walk’ などの動作が伴う活動を多く取り入れた点も評価され得ると考える。英語指導員のこれらの言葉に注意を払い、俊敏に行動する子ども達の様子が見られる。言葉の音刺激的側面が行動統制に関り、言葉が動作を発動させる機能を持つ幼児期には、言葉と動作が一緒に行われる活動は大変適していると考ええる。

楽しかった経験としてハロウィンについて報告しているものが、かなりの件数（約半数）あった（記憶に新しいせいもあるだろう）。当初、馴染みの薄い米国の行事であるハロウィンに対して興味を持たせることは困難のように思われたが、*Where’s The Halloween Treat?* の絵本を繰り返し読んだり、ハロウィンの写真が掲載されている絵本や ‘jack-o’-lantern’（かぼちゃちょうちん）の装飾品を普段から展示してもらった中、子ども達は少しずつイメージを広げて行ったようである。ハロウィン関連活動の最終日には、仮装して家々を廻るという実際の雰囲気但至少でも味わえたらと考え、パレードをすることを計画した。お面やキャンディーを入れる袋を作るという活動も、ハロウィンについて意識し、想像することを促す結果となったと考える。ドアをノックして “Trick or treat.” と叫び、キャンディーをもらおうという経験はたいそう印象深かったようである。「帰宅後、『“Trick or treat.” と言ってお隣さんに行ってきたもいい？』とさっそくその気になっていた。」といった回答もある。

異文化的内容に触れさせる活動においては、内容を構成している種々の要素に関連する、面白いと感じる活動を多面的・総合的に体験させることが望ましいと思う。その中で、子ども達は想像力を駆使し、主体的に未知のものを理解しようと努める。こうした態度を育てることが、将来異文化や価値の多様性を前にしても、それを肯定的に受け入れる姿勢に繋がると考える。これこそが、第一章で触れたように幼少期における異文化教育の大きな成果と言えるだろう。

本年度からの英語を使つての遊び・活動は、ほとんどの子どもが興味を示しているという点では、

“We are on the right track.”と言えよう。子どもが遊びとして受けとめ、楽しい活動に参加する中で、その活動の文脈上の言葉を自然と耳にし口にするようになり、いつのまにか英語のリズムや音に対する感覚や意識が育つように、活動内容の工夫が今後とも必要であると考えます。

次章では小学校での英語活動の経験を持つ筆者が、幼児期における異言語・異文化活動について、小学校の英語活動との関連から考察を行う。

## 参考文献

柏木恵子(1988).『幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に』東京大学出版会  
(第三章担当：太田雅子)

## 第四章 小学校英語活動からみた就学前異言語・異文化活動の意義と今後の課題

小学校学習指導要領で「総合的な学習の時間」が創設され、2002年度から実施される予定となっている。その中で「国際理解」あるいは「外国語会話」を扱う可能性が高く、英語学習が広くすすめられていくと予想される。現在でも、頻度は各学校によって違うが、研究開発校を始め多くの公立小学校において、「英語活動」が行なわれている。金沢市においては平成8年度より開始され、平成11年度まではそれぞれの学校の裁量で、「特別活動」や「ゆとりの時間」を利用して英語活動がなされている。現状では、各学期に1回から週に1回の学校まで、時間的にも学習量にも幅が出ているようである。こういった状況の中で、幼稚園から異言語・異文化活動を行なうことの意義と今後の課題について考えてみたい。

### 第一節 小学校における英語活動の位置付け

小学校学習指導要領において、英語活動が組み込まれる「総合的な学習の時間」のねらいは、2点挙げられている。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的に、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

これらのねらいを踏まえた上で、国際理解、外国語(英語)会話が例の一部として挙げられている。さらに、外国語に関しては、次のように述べられている。「国際理解に関する学習の一環として外国語会話等を行なうときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行なわれるようにすること。」(平成10年12月14日告示『小学校学習指導要領』より抜粋)となっている。

このことから考えられるのは、中学校で行われているように教科として英語を学習目標とするのではなく、小学校段階にふさわしい体験学習を通して、異文化に触れさせる機会となるよう、各学校が工夫を任せられているということになる。つまり、外国語の技能の習得を目指すのではなく、

太田 雅子・池中 雅美・澁谷 良穂・米田 佐紀子

体験主体の活動を中心に行うことが望まれている。

また「総合的な学習の時間」には、「国際理解」や「外国語会話」の項目以外に、「環境」や「福祉」などもあげられており、他の教科との関連に配慮することも必要とされている。そのため、小学校によっては「国際理解」や「外国語会話」を取り上げないという選択も可能になるのである。

以上のことから、現在の小学校英語活動の目的は英語学習の観点からすれば、非常に曖昧なものであると言える。

## 第二節 小学校での英語活動の現状とその問題点

現在、筆者は幼稚園での英語指導員と並行して民間指導協力員として公立小学校の英語活動に関わっている。この経験を通して EAA（民間指導協力員）としての活動を希望している人が多いということを知った。しかし、英語活動で小学校を訪れた際、一度も他の EAA と会ったことがなく、情報交換の機会もこれまでなかった。筆者が担当した学年が以前にどのような英語活動をしていたのかということもほとんどわからなかった。このため、筆者が児童にとって初めてだと思って選んだゲームや歌などが、活動開始後に既習であるとわかることがたびたびあった。英語学習には繰り返しが効果的である。しかし、以前どのように提示され、どの程度児童が学んでいるかを知った上で活動を行なうか否かでは、提示の仕方も違って来る。また、同じゲームばかりでは新鮮味に欠けるであろう。

ここで問題なのは、一言で言えば小学校での英語活動において学校内での連絡・連携、カリキュラムの一貫性が欠けていることである。学校裁量である以上、どういった視点を持ち、どんなカリキュラムで英語活動を行うかを各学校が明確にしない限り、この問題は解決しないだろう。

## 第三節 小学校から見た就学前異言語・異文化活動の意義

上記のような状況の中で、幼稚園で異言語・異文化活動を行うのは、無意味なようにも考えられるかもしれない。しかし実際、かなり多くの児童が小さい時から英語を習っている、あるいは習ったことがあるなど、英語学習の経験を持っているということがわかった。これらの子ども達の英語活動の時間での反応を見ると、英語への反応が早かったり、英語への抵抗感や違和感が少ないといったことに気づく。幼稚園時代あるいはもっと小さい時に英語活動を経験した子ども達が小学校に上がった時にこのような特徴が見られることは、第一章で述べたように幼児期に異言語・異文化に触れることの利点を裏付けている。

今年スタートした幼稚園での異言語・異文化活動を経験した子ども達が、小学校に上がる2001年度は「総合的な学習の時間」への過渡期となる。今の公立小学校での英語活動の現状からすると、幼稚園での週に1回のペースが、月に1回、あるいは各学期に1回のペースになることも予想される。英語に触れる時間が減る子ども達も出てくるだろう。英語学習の面からすれば、継続が図れない以上、無意味という人もいるかもしれない。しかし、幼児期に異言語・異文化に触れることの意味は英語学習だけではない。早い時期から外国語に触れたり、外国の生活や文化に親しむ経験をすることは、異文化や異言語を受け入れる素地を作ることになる。

このことが、異なった言語、文化を持つ他者を受け容れる心と同時に自分を肯定する感情を育て



ることにつながっていく。日本人はコミュニケーションが下手だと言われているが、このことについて中本幹子氏<sup>15</sup>は、「コミュニケーション能力に劣るのは、日本人の子ども達のセルフエスティーム（自尊感情）が低いことに関係しているのではないだろうか。」と指摘している。自分自身を肯定的に受容させることにより、学習への自信をつけさせ、また向上心を持たせることが可能になるのではないか。子ども達が主体的に異文化体験に関わり、自己表現をしていくことを目指し、それを実践に移した英語活動こそが意味のあるものとなる。

幼稚園時代に英語活動を経験した子どもとそうでない子どもが小学校において混在する中、英語活動の経験を持つ子ども達は、そのことが自信となって、積極的に小学校生活においても関わりを持つとしようとする態度が養われるのではないだろうか。英語という言語に関心を持ち、もっと知りたい、あるいは活動が楽しいという気持ちが、今後の英語学習に対する動機付けとなるのは確かなことであろう。

#### 第四節 今後の課題——就学以前の活動と小学校英語活動との連携

学校教育は意図的・計画的・組織的に行われるべきものであり、さらに継続性も重要である。文部省の学習指導要領に述べられている目標、つまり「主体性と創造性を持った国際社会に対応できる人間の育成」のためには、できるだけ幼稚園から一貫したカリキュラムが立てられ、その中で活動がなされていくことが理想である。言語教育にもこのことはあてはまる。しかし現実には、幼稚園教育は義務教育ではなく、また文部省の幼稚園教育要領では国際理解について言及されていない。このことから、幼稚園と小学校の教育内容についてどこまで連携を図れるか疑問である。

いずれにせよ、小学校の「総合的な学習の時間」の活動例となっている外国語（英語）会話は、「国際理解に関する学習の一環」として位置付けられている。国際理解をするための英語、つまりコミュニケーションの手段としての英語学習と理解できるであろう。そうであるならば、英語学習がしやすい環境を提供し、できるだけ一貫したカリキュラムの中で積み上げていく学習としなければならない。また、生きる力を養うためにも、聞いたことを理解し、自分の考えを表現できるように、聞くこと、話すことに重点がおかれた活動であることが望ましいだろう。

#### 参考文献

金沢市教育委員会 2000年3月『英語活動の指針Ⅲ』

中本幹子（2000年11月5日）「日本児童英語教育学会関西支部研究会口頭発表より」

和田 稔監修（1999）『小学校英語教育 A to Z』 vol.1 開隆堂

（第四章担当：池中雅美）

<sup>15</sup> 中本幹子（2000年11月5日 日本児童英語教育学会関西支部研究会口頭発表より）

## 第五章 結論

以上、この半年間を振り返り、筆者達四名が共同研究として幼稚園二園で行ってきた「異言語・異文化に触れる活動」について、実践をもとにその成果を述べてきた。

まず第一章では、就学前という幼い時期に異言語や異文化に触れることには幼児の言語習得の特性、音声面・心理面・発達段階などからみて多くの利点があること、そして国際語である英語を活動の中心に据えることやまだ心の柔軟な時期に異文化に触れることの意義について言及した。

第二章では幼稚園での異言語・異文化活動の目的を述べた上で、教材・指導面・幼稚園教諭と英語指導員の連携等さまざまな側面から実施園での実践報告を行い、それらについての考察を行った。その結果、繰り返しやリズムの重要性、幼稚園教諭と英語指導員の連携の必要性など今後の活動につながる大切なポイントが明確になった。

第三章では実施園の保護者及び幼稚園教諭を対象としたアンケート調査の結果と実践観察に基づき、子ども達が異言語である英語やそれを通して異文化に触れることを楽しみ、生き生きと活動している様子が見られることが報告された。またこれが将来肯定的に異文化や価値の多様性を受容する姿勢につながると述べられている。

第四章では幼稚園における異言語・異文化活動の意義を、小学校の英語活動との関連から考察した。現状では難しいものの将来的には幼稚園教育にも国際理解教育を取り入れ、小学校との連携を図ることが理想であると結論づけている。

これまで見てきたように幼少期における異言語・異文化教育には利点があることは確かである。理想的には幼稚園での活動を小学校において、継続・発展させていくことが望ましい。今後の課題は多いが、我々が現在行っているような実践を積み上げていくことによって、一步でも理想に近づくことができれば、と願っている。